

第16号

発行：Dream 五代塾
吹田市千里山西 5-14-17
発行責任者：理事長 川口 建

「赤心」が心

Dream

五代塾

Godaijuku

Sinbun (新聞)



薩摩藩英国留学生記念館記念碑より

五代友厚の「直貿(じきぼう)」を

具現した 兼松房治郎 (上)

Dream 五代塾顧問 曾野豪夫

五代友厚は慶応元年(一八六五)、十四名の薩摩藩士英国留學生の引率者五名中の副使の一人としてヨーロッパに向かった。欧州大陸諸国も巡遊した五代は、ロンドンで十八ヶ条の建言書を執筆した。その中に、薩摩藩独自で或いは各藩合同で商社を設立するべきであるとの提案を幾つか行っている。これは幕府による長崎出島でのオランダ商人との貿易独占を排除して、日本全体として各地での産業力を高めよう、との意図によるものであった。

「堂島米会所」「堂島米商会所」

江戸時代、大坂の「堂島米会所」は二百余年にわたり米穀などの相場と物流を担った重要な取引所だった。しかし、明治維新直後に米価が急上昇して安定しなかったため、新政府はその元凶が堂島米会所にある、として廃止してしまっただけでなく、翌二年同所は復活された。九年、大阪の実業界で大きな力を得ていた五代を中心にその機能を「堂島米商会所」としてさらに発展させることとなった。

兼松房治郎、三井組銀行部に就職

弘化二年(一八四五)大阪市江之子島で生まれた兼松は、恵まれない家庭環境の下で育った。そこは中之島の川下で、二番目の大阪府庁舎が建設された地域であった。その間にも涙、語るも涙の兼松の波乱万丈の半生記はいずれ紹介するとして、先を急ぎたい。

明治三年二十五歳、兼松は横浜で友人と二人で蚕卵紙相場の取引で相当額の利益を上げたが、遠いヨーロッパの普仏戦争勃発により国際相場が暴落して一敗地にまみれた。若くして大金を得た頃の兼松の背広姿



兼松房治郎 横浜にて(明治3年)

の写真は、歴史的にも貴重なものと思っている。三井住友、三菱などその後貿易や工業で大を成した会社のトップが、明治三年に背広姿で写した写真を私は見たことがない。精査した訳ではないが、大倉喜八郎は四、五年に海外視察をしている。しかし、三年に東京か横浜で背広姿の写真があるかどうか…

ある長袖、長羽織の悠長な役所風の服装を廃して平民的な前垂れ掛けとすることを提案した。これは行員には不評だったがやがて実現された。また、③日本風の帳簿を廃して西洋式簿記法(要するに複式簿記)に改めることも兼松の提案であったと言われている。私は、兼松に入社して伝票書きをさせられた時、基礎知識がなかったので大慌てで年長のベテラン女性に教わった。おかげで今でも B/S(Balance Sheet)の見方の役に立っている。K子さん、有難う。

「堂島米商会所」、

「大阪商法会議所」肝煎に

明治九年「堂島米商会所」の発足に際して、三井組三井元之助は兼松を元之助の代理として米商会所の肝煎(今でいう専務理事か)として送り込んだ。これは全く異例のことであった。



初代会議所 (Wikipedia)

兼松は横浜からアメリカに行く希望をもって英語を習ったりして適当な仕事を探していた。六年、大阪に戻る船中で偶然にも英語の恩師に出会い、兼松は三井組銀行部三井元之助を紹介してもらった。面接の折二十八歳の兼松は、「銀行員として忠実に働くこと」を諭されて就職することができた。最初はなんと丁稚待遇だった。兼松は朝九時からの勤務であるにも関わらず自ら七時から出勤して掃除などの下働きをなし、若い丁稚からも「房吉」「房吉」と呼び捨てられていたが意に解さなかった。「吉」とは丁稚に対する呼び名だった。とに角一時は小なりと雖も「紳士紳商」の仲間入りをした身である。「房吉」と呼び捨てにされながら、自らも幼少の頃に丁稚勤めをした苦勞話しを若い丁稚に語りつつ、お客様対応の仕方、帳面付け、算盤や英語などを教えたので自然と周囲から敬服されるようになった。

ある日、支配人西邑帛四郎(にしむらとらしろう)が房吉を呼んだ。「職務に三年間勤勉に勤めたことに感じ入った。今日より管理職に抜擢する」。その後兼松は西邑に幾つか提案した。①三井銀行は諸官庁の金融のみを扱っているが、民間の金融も扱って。これは実行されて数十万円の巨額の新規預金を集めることができ、銀行の基盤を強固にすることができた。②行員の服装に関しては、行員の誇りで

十一年、大阪商法会議所の設立に際して初代会頭に就任する五代は、自分より十歳若い兼松を会議所の初代肝煎に据えた。一市井の貧乏の極みにあった丁稚上がりの男が、三井や五代に認められて登用されたのは彼自身に対する僥倖もあったが、全く日々兼松自身の刻苦勉勵の賜物であった。会議所設立までの数年間大阪には二百余りの商業仲間が乱立しており、会議所はそれらを整理したり、指導したり、資料の蒐集などを行うことになった。会議所設立後、政府や東京商法会議所などから求められる多岐にわたる諮問報告、大商としての資料や統計書の作成などの多くは兼松の

調査と執筆能力によるものであったと思う。

大阪商法会議所総会

九月、会議所設立総会が西本願寺津村別院で開かれた。因みに私の外曾祖父永見米吉郎は、三ヶ月前に設立された大阪株式取引所の初代肝煎



北御堂(ライデンコレクションより) 毎末に来日したオランダ人が撮影したもの。オランダのライデン大学が所有するコレクションの1枚。淀屋橋方面より南を望む。門前には燈籠があり、かつて松の飛騨地と称された北御堂の姿が撮影された貴重な写真。

出展：北御堂ミュージアム

とも親しい間柄であった。会議所の総会が開催される場台外曾祖父は長崎以来の五代の信頼が厚い子分として、五代の近くに兼松と共にいたはずである。(私の父は、後述する兼松が興した商社に就職し、私も娘も三代続けてお世話になることなど誰も想像できないことであった。残念ながら四代目は縁がなかった。)

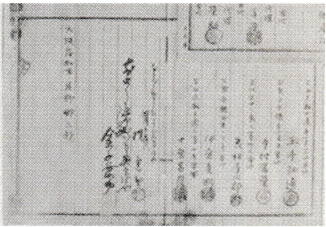
平成二十八年(二〇一六)、まだテレビや映画では五代のなじみが薄い七年前のことだった。NHKのあるテレビ番組で会議所の総会の場面で「北海道開拓使官有物払い下げ事件」に関連して、会議所議員の多くが(約十名の殆どが)五代会頭を難詰して机上の紙を礫にして投げつける場面があり、私は息をのんで驚愕した。存命なら五代も兼松も永見もはらわたが煮えくり返ったことだろうと。私も腹がたつた。会議所議員は藤田伝三郎、広瀬幸平(住友左衛門の総代理人)、中野祐一、芝川又平等など大阪財界の教養豊かな錚々たる商人のお歴々である。大阪商人が、元武士である五代会頭に何か不満があると総会の席上において皆で怒声をあげて紙礫を投げつけるとは! その晩、私は寝られなかった。

私は≡夫、会長、同大阪局長に早速抗議の書信を送り、大阪商工会議所会頭には≡天に抗議をするように申し入れた。ある日、電話が鳴った。「會野さんですか、私は≡天大阪局次席のダレソレです。会長宛てに五代のことで手紙を書かれましたね。いま、大阪局長の前から電話をかけています」「はい會野です」「お手紙の内容についてですが、あの番組はフィクションですから、「云々」「あ、フィクションですか?」。もう少し何か言ったかもしれないが、「フィクション」と言われたら釈然としない思いで電話を切らざるを得なかった。(≡天も会長宛ての苦情には response するのだ、とその時分かった。)

会議所の常務理事からは過去のことには関心がない、と言っような返書があり、これまた釈然としない思いで読み返した。そしてその十年程前に幾度かお会いした佐治敬三会頭も同じ返事をされたであろうか、と思った。佐治会頭は、五代の遠い親戚である私に非常に丁寧なご挨拶をして下さっていたので恐縮し、思い出があつた。(話が逸れて恐縮)

「大阪商船」創業取締役

三井銀行と会議所を辞した兼松は、関西以西の小さな船会社を糾合して「大阪商船」を設立する準備に奔走し、瀬戸内沿岸の中小の船主を訪問して合同を呼びかけた。結局中小の船主五十五名、船舶九十三隻を糾合して十七



創立願書 3人目兼松房治郎

年大阪商船会社が設立された。広瀬幸平が社長に就任し、兼松は取締役運輸課主管の要職に就いた。(明治時代は部とか局という概念はなかったのではないかと思う。)

「大阪毎日新聞」創業社長

兼松は、幕末から明治の初めにかけて江戸や新開港地横浜と新潟で欧米人と少しばかり貿易交流などの経験があつた。当時、日本の貿易の九割が外国に開港された横浜、神戸、長崎、新潟、函館などに限られてスタートした。心は早まれど徒手空拳、成功した事業はなかった。従い、五代から幕末時代の上海やヨーロッパの見聞と維新直後の大阪や神戸での渉外交渉の実情を詳しく聞いて心が踊らされていた。自己の利益のためではなく、日本国のための「直買」は彼の夢となつていった。

明治十年代に入って以降の日本の新聞は、現在のように中立を掲げる企業によるものではなく、人物を中心に集まる主義主張の発表機関であつた。そのいずれもが官憲の支持によるか、政界の勢力を背景とするものだった。横浜で明治十八年、「北海道開拓使官有物払い下げ事件」に関する五代への新聞攻撃はこのような政治的背景によるものだった。

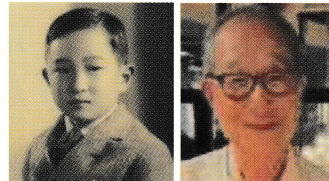
大阪の実業団体「同遊会」では兼松を中心に純粋に大阪実業界を基盤とする言論機関設立の声があつた。そこで明治二十年(一八八七)頃経営難に陥つていた「大阪日報」を譲り受け、その経営の任にあつた。そつした中、いよいよ兼松は日豪直貿易の可能性の市場調査のため



NSW 州開国 150 年記念のお皿 (昭和 12 年)

め十一月から半年余り自費でシドニーとメルボルンに旅立った。

この一八八七年は、豪州 NSW 州の開国一〇〇周年の年であつた。五〇年後一九三七年、私が四歳の時に両親が NSW 州開国一五〇年記念に購入した記念の大皿を私はお仏壇の脇に大切に飾ってきた。歴代総督の肖像画があしらつてある。私は兼松を退職後、五年余り勤務したオーストラリアの在京大使館に寄付しようかな、と思案中である。早くしないと私は九〇歳を超えてしまった。



筆者 5 歳と卒壽の写真

翌明治二十一年兼松は大阪日報を「大阪毎日新聞」と改題して初代社長兼主幹となり、大阪財界のためにマーケット情報を掲載し、また論陣を張つた。資本金三万円は友人知古と出合つた。さらに翌二十二年(一八八九)、毎日新聞社の事務所を淀屋橋の少し下流側の

大川町 大阪の簿記学校跡に移転した。私の外祖父父永見邸の数軒先だった。どちらも現在の新任友ビルの西北と東北の一角である。



創刊 2 日目の「大毎」 右兼松房治郎社長

明治二十二年、既に功なり名を挙げ、この資産を得、初老の域に達していた四十四歳兼松房治郎は大阪毎日新聞社を本山彦一に譲り、社長を辞任してオーストラリアとの冒險的な直貿易業に進出することを決意した。友人は叫んだ。「兼松君、狂せり!」

五代の生涯の偉業 「弘成館」鉱山業(六)

Dream 五代塾顧問 八木孝昌

明治元年発見の天和銅山

五代が最初に買った鉱山は大和国(現奈良県)吉野郡天川郷にある銅山の天和山(てんかさん)でした。このことには五代の鉱山業の導入部として、連載第一回(本紙10号)で軽く触れましたが、今回は少し詳しく見ることにします。

天和銅山は明治元年に地元板尾村の住人岡田左衛門によって発見されました。翌年四月には岡田と「鉱山方」森清之助との間で、それを「金五十両」で売り渡す約定が交わされました(『五代友厚伝記資料』第三巻史料一六)。どのような経緯があったのか定かではありませんが、明治四年(一八七二)十月にその銅山が五代友厚に譲渡されました。

五代が鉱山業の会社「弘成館」を設立したのは明治六年(一八七三)一月です。そのころ、五代は会社設立の一年以上前に、先行して天和銅山を購入したことになります。その動機には二つのことが考えられます。

一、五代の鉱山業への志には、「農工と鉱山は国の本なり」という藩主島津斉彬の教えが基本のところにあります。五代は幕末の英国留学中に親交を結んだバルギー貴族モンブランとの間で日本の鉱山開発についての「契約書」を交わしましたが、幕末の動乱の中で実行に移せませんでした。その鉱山開発を、明治になって五代は単独で開始したことになります。

二、明治四年四月から金貨・銀貨の铸造を開始した大阪の造幣局に、五代は明治二年に大阪の今宮に設立していた金銀分析所を通じて金・銀の地金を納品し、「巨万の富(五代

龍作『五代友厚伝』を得ました。五代はその利益を天和銅山購入に投じて、もともと計画として抱いていた鉱山業に乗り出したと言えます。

これまでの五代の伝記作家たちは五代の鉱山業をあまり重視していません。けれども、五代には日本の将来についての明確なビジョンがあり、近代日本の発展に必要な不可欠な鉱物資源の確保を自己の使命としています。その観点からの五代の再評価がぜひとも必要です。

天和銅山は最優良銅山

天和銅山跡は近鉄吉野線下市口から奈良交通バスで天川和田まで、一時間以上かかる山奥です。天和銅山は鉱石中の銅分割合が高い優良な鉱山で、操業開始直後から順調に利益が出ました。明治五年七月度の奈良県令四条龍隆平に宛てた天和銅山稼主中井新八(代)保田広吉名の天和銅山収支報告書(『五代友厚伝記資料』第三巻史料二六)があります。

出鉱銅分：二七、六九五貫(一〇三ト八五六キロ)

代価：三三、八八八円
利益：二二、一九五円

これだけを見ると、五代の鉱山業の将来は順風満帆に見えますが、その後買い増していった鉱山の多くは不採算で、全体を連結決算すると赤字になることもありました。初期に黒字を計上したのは、天和銅山以外では、備前国(岡山県)の和気山(銅)と近江国(滋賀県)の蓬谷山(銀・銅)の二山でした。優良鉱山と目された明治七年取得の半田銀山は赤字続きで、その採算が黒字に転換したのは明治三年(一八八〇)からでした。

『五代友厚伝記資料』第三巻史料七に、鉱山事業初期の月次決算諸表が出ています。それを筆者が寄せ集めて特定の項目を一覧表にしてみました。

「弘成館」鉱山業月次損益 (単位：円)

明治	天和山	和気山	蓬谷山	半田山	大久保山	柴口山	久地山	連結損益
9年7月	905	3,248	431	△3,083				1,475
9年8月	△3,223	1,821	1,382	△5,617				△6,006
9年10月	719	6,694	769	△8,591				△843
10年5月	23,200	6,619	△2,091	△4,964	△1,145	△736	△2,643	15,712
10年7月	11,011	822	△358	△1,788	△287	△175	△1,234	7,715
10年8月	14,258	115	△876	△2,841	△610	△625	△2,097	6,542
10年12月	25,574	520	△2,522	△8,958	△1,999	△3,115	△1,967	5,445
11年1月	9,786	△50	△54	△1,784	63		800	8,164
12年6月	6,641	309	△841	△6,025		△541	△2,334	△4,881
12年8月	626	△1,113	△155	△254			△4,931	△6,605

(注) ① 損益に「内部費用」が立てられていて、それを組み込まないと各鉱山の損益の合算と連結損益の金額は一致しないが、「内部費用」は微額なので省略。
 ② 久地山は明治一〇年五月で消え、以降は大倉志山に交代。
 ③ 大倉志山は明治一二年六月に、駒婦山・瓜根山・福山山の三山に交代。
 ④ 駒婦山・瓜根山・福山山三山は明治一二年八月に福山山が大立山に交代。

「弘成館」事業の苦闘と歴史的役割

この表で顕著なのは、天和山が先頭を、和気山銅山が二番手を追走して「弘成館」鉱山業を支えている構図です。天和山の収益性は圧倒的です。五代は「弘成館」事業をより盛大にするために、明治七年に半田銀山を購入しましたが、そこで誤算が生じました。半田銀山の地元から、工場排水が稲苗への悪影響を及ぼすという指摘を受けて、工場は稲作期間の半年間休業することになりました。その結果、半田銀山は恒常的な赤字に陥りました。それ以外の諸鉱山も赤字が続いていますので、言わば天和山と和気山で出した利益を残りの山が喰いつぶしている観を呈することとなりました。

人間の食を支える農業に敬意が払われるのに対して、鉱山業者を「山師」と呼ぶ俗語があるように、人間の生活を支える鉱山業にはほとんど敬意が払われません。私たちの生活が鉱物資源抜きには成立しないにもかかわらず、私たちは金属を製品として享受するだけで、資源発掘の鉱山業に思いをいたすことはありません。鉱山業はどこまで行っても縁の下力持ちです。時代を遙か先まで見通していた五代は、そういう地道な仕事を自己の使命としたのでした。(次号に続く)



「てんかわ天和の里」(元天川西小学校校舎)の天和鉱山展

紡績百年の碑 未来へ繋ぐ

Dream 五代塾理事長 川口 建

仙巖園と尚古集成館

鹿児島市市から国道10号線を北東に進み、鳥越トンネルを抜けるとすぐ右側に旧鹿児島紡績所技師館(異人館)が見え、間もなく仙巖園、尚古集成館の駐車場に着く。仙巖園は島津家の別邸としてつくられ、錦江湾や桜島を借景とする雄大な庭園となっている。また、幕末の名君と謳われた開明君主・島津斉彬(第11代薩摩藩主)は日本全体を見据えこの地に東洋最大の工場群「集成館」を築き、製鉄・大砲・造船・紡績・ガラス・薩摩焼など豊かな国づくりに目指した。しかし、斉彬の急逝により事業は一時縮小されたが、藩主忠義の後見人久光は、兄斉彬の集成館事業の再興に取り組んだ。



尚古集成館の正面玄関

日本の紡績業は、江戸時代に綿花から綿糸を製造するには「手紡ぎ」という家内制手工業に頼っていたが、明治初期に「ガラ紡」の発明と動力に水車を活用し生産性は向上した。しかし綿織物の原料となる綿糸は国内調達としては慢性的に不足しており、国内生産の拡大は喫緊の課題であった。特に薩摩藩では他藩に比して帆船を多く所有し、その「帆布」に使用する需要が多かったと思われる。当時の薩摩藩は「五代才助建言書」を採用し、1865年の「欧州視察と留学生派遣」を実現した。五代はそれらの任務の一つとして、世界

最大の紡績メーカー、プラット・ブラザーズ社から開綿機、梳綿機、堅錘精紡機、斜錘精紡機などの紡績機械一式と力織機をバリスフォード社に発注し帰国している。購入機械や招聘したイギリス人技術者の鹿児島到着後、建設・機械設置を一気に進め、日本初の洋式紡績工場「鹿児島紡績所」を誕生させた。

現在の尚古集成館本館には、先の太平洋戦争で大半の機械が全焼したが、唯一紡績機械類の梳綿機(そめんき・紡績工程の一機械)一台が無傷で残った。これは日本紡績史の象徴であり、生き証人である。満百歳を迎えた昭和41年(1966)に尚古集成館に飾られた。

紡績百年の碑

尚古集成館の玄関横の緑地内に「紡績百年の碑」が立っている。1967年に日本紡績協会が紡績業100周年を記念して建てた石碑が立つ。今から56年前である。建立式典には、日本繊維産業連盟初代会長、東洋紡社長を務めた実業家、谷口豊三郎紡績協会会長が参加するなど盛大に行われた。



紡績百年の碑

この碑の由来は『鹿児島百年(上)幕末編』の中で見つけることができた。掲載文章を原文のまま紹介する。

1967年5月26日午後4時すぎ。こう書くと物語りめくが、確かに二世紀を超すドラマになりそうである。その時刻、鹿児島市の尚古集成館前で、「紡績百年の碑」の除幕式が挙げられたことは、マスコミによって広く紹介された。興味深いことは、2067年5月15日に発掘するよう私たちの子孫にあてた「遺書」を、タイム・カプセルに入れ、碑の下に深く収めた(昭和四十二年十月五日埋蔵)ことである。カプセルはガラスの十五倍の強度をもつメタア

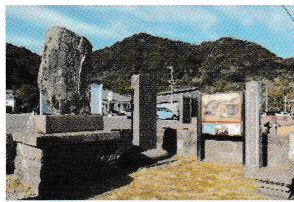
クリル樹脂製で、縦二十七センチ、横五十二センチ、高さ四十七センチの透明の箱である。

このカプセルには、日本紡績史、統計資料、映画フィルム、内外の紡績の実態等が収録され紡績の全てが分かるようになっていた。もちろん、カプセルを開いた人たちに「紡績業200年に寄せて」という、挨拶状も添えてあるそうである。今から44年後に発掘する予定になっているが、国内の紡績業、繊維産業はどうなっているだろうか。

筆者は確実に生存していないが大変興味深い瞬間になると想像するしかない。

日本の『始祖三紡績』

鹿児島紡績所は、慶応3年(1867)に尚古集成館一角(磯ノ浜)に建設された。当時の工場建設・技術指導はイギリス人技師を招聘し、彼らの宿舍として鹿児島紡績所技師館が建てられ、現在異人館として残されている。



鹿児島紡績所跡記念碑

薩摩藩には石河確太郎(正竜)という、大和高田市郡歌傍石川村(現奈良県橿原市)出身の蘭学者がいた。石河も五代と同時期に機械紡績の導入を藩主に進言している。五代のイギリスでの機械購入には石河の知識やアドバイスが大きく関わっている。堺紡績所の設立は、大阪は綿糸・綿布取引の中心地であり、原料綿の産地は河内、大和(奈良)をひかえていることで堺に注目し、現在の大阪府堺市堺区戎島町に建設された。生産設備は五代が輸入した鹿児島紡績所の紡績機械の一



堺紡績所記念碑と明治天皇行幸碑

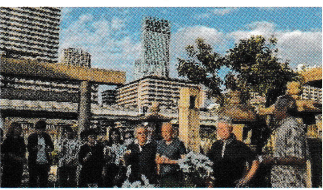
部を移設することとし、工事は石河と鹿児島熟練工があたり、日本人のみで完成させ、明治3年(1870)に操業を開始した。当時の運営責任者として工場建設・生産は石河確太郎、営業は五代友厚が担った。機械紡績工場としては日本で2番目の工場である。

イギリス製の機械を備えた本格的な近代工場であったが、多くの見学者がためかけ、明治10年(1877)には明治天皇が行幸されている。尚、操業翌年には廃藩置県で政府の所有また、所有者の変遷もあり現在に至っていない。いずれにしても、紡績業の近代化の魁は「鹿児島紡績所」、「堺紡績所」であり、そして東京の木綿問屋の「鹿児島紡績所」(明治5年)は、日本の『始祖三紡績』といわれている。

五代友厚公墓参



9月25日 16時より大阪市設南霊園4区内において、執り行い、1年間の報告をしました。官有物払い下げ事件の五代の濡れ衣を、八木孝昌氏や末岡照晃啓氏が立証し、教科書修正が実現できたこと、また、Dream五代塾の活動として八木孝昌氏、田中光敏氏の講演会(本紙第14号掲載)を開催できたことです。最後は薩摩の焼酎で献杯し、全員で懇親会を行い、五代さんに纏わる話をしながら楽しく墓参会を終りました。



(連絡先: 川口建) Email: gogoken12345@gmail.com Tel: 080-4497-5688 HP: https://www.dream-godai.com

